奨励賞

言葉の重み

「お前ってウスバカゲロウみたいだな。」
中三の春、幼稚園から仲の良かった友人が僕の頭を見て笑いながら言った。何が言いたいかは直ぐに察しがついた。何故なら最近、僕の後頭部の髪の毛が薄くなってきた事を家族から指摘されていたからだ。だから僕の頭部を観察してきた時点で、「あ、こいつ、いじってくるな。」と直ぐに気がついた。でも自分が気にしている事を更にいじられるのが嫌だったから、「ウスバカゲロウ」の実体も分からないまま、
「おいおいそんな事言っちゃって良いのかな。」なんて、ふざけながら笑ってその場をやり過ごした。
　学校で友人に言われた台詞がずっと頭から離れなかった僕は、帰宅して直ぐにインターネットで「ウスバカゲロウ」を検索した。「ウスバカゲロウ」とは透き通った羽の細くて綺麗な昆虫の事だった。でもその幼虫が最悪な容姿をしていた。ずんぐりした焦げ茶色の体の周囲に、まばらにチョンチョンとした毛が生えている大きなダニのような姿をした「アリジゴク」と呼ばれるものだった。「これの事か、友人の頭をアリジゴクに例える何て失礼な奴だ。」と急にイラッとして怒りと悲しみが入り交じったような、とにかく不愉快な気持ちになった。
　悩みを一人で抱え込まない方が良いと思い、その出来事を親に相談してみた。すると、
「薄毛を指摘されて悲しい気持ちになって悩んでいるあなたを見てると、母の方が悲しくなっちゃうよ。だからそんな事で悩んでほしくない。」
と言いながら、母は何故か父と母の結婚アルバムを持ち出してきた。母が指差した写真は、見た事のある親戚のおじさんたちが円卓を囲んでニコニコ笑っている写真だった。そして、そのおじさんたちの頭部は皆、気持ちの良いくらいに輝いていた。その時の僕は「僕の薄毛は遺伝だから仕方ない事なんだ。」と悟り、絶望を感じた。そんな僕に母は言った。
「あなたはお爺ちゃんの事、髪が無くても大好きでしょう？お爺ちゃんを見ていれば分かると思うけど、おじさんたちも皆、明るくて優しい素敵な人ばかりでしょ。」
「どうしても気になるなら今は人工毛の薄毛対策が色々あるから試してみるのも良いと思うよ。でも母はあなたに外見より内面を磨いて幸せになって欲しいな。」
僕に対する母の気持ちを聞いて「人は容姿ではない」と感じたし、薄毛は大して恥ずかしい事ではない気がした。

大概の事は受け流せる僕が何故、仲の良い友人からの一言にこれ程傷付いたのか、その理由は僕が今まで容姿についていじられて事なく過ごしてきた為、いじられる側の気持ちに気付いていなかったからだったと思う。

思い返すと過去に最悪な事を言った事に思い当たる節がある。僕が

「お前って〇〇って言う芸能人に似てない？」

などと言って友人をからかって芸能人の名前で呼んでいたことがあった。すると次第に周囲も同じように呼び始め、その友人は暫くの間、自分の名前ではなく、芸能人の名で呼ばれるようになってしまった。でもその時の僕は「いじる側」で、ただ場が盛り上がる事に満足し、あだ名を付けられた友人の気持ちなんて少しも考えていなかった。あの時、友人はどんな気持ちだったのだろう、できる事なら今でも謝罪したい気分だ。

「言葉」は人が生きる上で欠かせない道具であり、僕たちの思考や感情、人とのコミュニケーションに大きな影響を与える力を持っていると思う。特に現代社会においてはＳＮＳなどの発展によって言葉の影響力は凄まじい。たった１クリックで情報を世界中に広められる現在、発信する側は言葉の選択に細心の注意を払う事が必要だと思う。無責任な言葉で誤解や偏見を起こさないよう、僕はこれから、思いやりのある言葉を慎重に選んだ発言や発信をして行きたい。